

■今月の特選句

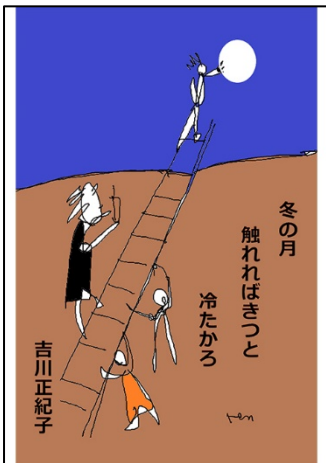
2019年4月



籠城にのみ勝算の花粉症

堀川明子

俳句は表現の独創性で輝く。この句では「籠城に勝算」である。つづめて言えば「花粉症にならない方法は外に出ないこと」を仰々しく表現。



冬の月触ればきつと冷たかる

吉川正紀子

俳句は「童の心」で詠めば佳句となる。「冬の月の色が白く冴えている」という表現なら単なる写生だが、冷たいだろうと感じて詩となった。



公園の制空権をシャボン玉

柳 紅生

「公園の空いつぱいにしゃぼん玉」と写生しただけだと、ありきたりである。しゃぼん玉を擬人化し、「制空権」の表現で佳句となった。



## 営巢のあいさつの糞初つばめ

荒井良明

巣造りをさせて下さいませ、とポトリと糞をした。昔から入居の挨拶に、これだけは欠かせないね。「挨拶」の上品に「糞」の下品で裏切りの構成。



## 耳たぶを搦りたがる春の風

稲葉純子

春の風を擬人化した。「くすぐる」という行為を「くすぐりたがる」と軽い表現にして明るい句となった。「耳たぶ」との組み合わせも良いね。



## 句作りの人生七分梅三分

赤瀬川至安

三分咲きの梅を観ていて、句作り人生ちょうど七分じゃわいと気が付いた。言葉遊びが句として成立した時、予想もせぬ深みあるものとなる。

## ■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

風神の袋をはたき春四番 ・・・袋の底の黄砂は要らんぞ	田村米生
おぬしらも一期一会か猫の恋 ・・・道ならぬ恋を猫も爺も	池田亮二
蒲公英を食べれば空を舞う気分 ・・・すでにあなたは仙人じやねえ	岡田廣江
啓蟄の音のもぞもぞしてをりぬ ・・・音をかたちの表現にして	梅岡菊子
病室に新茶薫らせ老いふたり ・・・仲良きことは宝と知りぬ	本門明男
バレンタイン媚薬少々振りかけて ・・・義理本命の区別もせずに	金城正則
耳寄りの話をみみに花筵 ・・・酒の肴は人の悪口	原田 暉
スマホにライン何が何やら亀の鳴く ・・・スマホラインで時間が無駄に	田中早苗
ヤバイかも卒業式に泣く担任 ・・・ヤバイとはまたヤバイ表現	土屋泰山
亀鳴くやひとの俳句のねたましく ・・・悔しさ嫉妬が俳人育てる	土屋虹魚
そよ風の按摩にほぐれ枝垂桜 ・・・枝垂桜は肩こりでしたか	花岡直樹
なぎ倒す技は一流春一番 ・・・手当たり次第にしたい放題	横山洋子
永き日の何も起こらぬ一日かな ・・・平凡がよし静謐がよし	稲沢進一

## ■今月の滑稽句

\* 今月の特選句・秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

凧合戦糸のもつれの下通る  
 おそ霜の土に平伏名草の芽  
 春の紅くつきりと妻さしにけり  
 ちくちくと古妻蜂の針のごと  
 四月馬鹿キャリア捨てさす恋に落ち  
 四月馬鹿末広がりの欲の皮  
 いぬふぐり犬は素通りしたりけり  
 春寒し鏡に映る馬蹄顔  
 烏貝の生みし神授の真珠かな  
 人妻に抱かれて丸し春キャベツ  
 啓蟄や外に出るにはお洒落して  
 舌出して悲しかりけり蜚汁  
 飛ぶためにたんぽぽ百才年をとり  
 この日ばかりにわか甘党把恋節(バレンタインデー)  
 春寒や茶室に響く膝の音  
 ブルドッグ紹介される春座敷  
 啓蟄やコンペ誘われ打ちっ放し  
 恋の色もろもろひかり桜散る  
 花筏人生の終わりはありがとう  
 胸底に花咲き散る声オンリーユー  
 下駄履かせ竹馬に乗せ大試験  
 春の夜や賞味期限はあと五分  
 謝肉祭ベジタリアンもやりますか  
 作業着に闘魂隠し啓蟄日  
 菜の花は浅漬がよし後二合  
 終の句や浅し広しの四月馬鹿  
 春の山近きにありて靄の人  
 一人居の夜の楽しさ餅焼ける  
 休日の理科室フラスコの水温む  
 こゑをあぐ土押し上げる春筍  
 啓蟄や狭庭の虫は惰眠らし  
 古稀の膝コキコキと青き踏む  
 ひよつとこの本音ひよこつと四月馬鹿  
 菜の花の黄を好めども黄は苦手  
 麗かや臉の奥の逃避行  
 金属音に冴え返るなり歯科の椅子  
 迷惑の二文字を知らず浮かれ猫  
 モンローのごとスカート押さえ春一番  
 春や春夫の好物土筆煮る  
 春うらら裏の小川のスケルトン

相原共良  
 相原共良  
 相原共良  
 青木輝子  
 青木輝子  
 青木輝子  
 赤瀬川至安  
 赤瀬川至安  
 荒井良明  
 荒井良明  
 井口夏子  
 井口夏子  
 井口夏子  
 池田亮二  
 石塚柚彩  
 石塚柚彩  
 石塚柚彩  
 泉 宗鶴  
 泉 宗鶴  
 泉 宗鶴  
 伊藤浩睦  
 伊藤浩睦  
 伊藤浩睦  
 伊藤洋二  
 伊藤洋二  
 伊藤洋二  
 稲沢進一  
 稲沢進一  
 稲葉純子  
 稲葉純子  
 井野ひろみ  
 井野ひろみ  
 上山美穂  
 上山美穂  
 上山美穂  
 梅岡菊子  
 梅岡菊子  
 梅野光子  
 梅野光子  
 梅野光子

春苺店頭セールを彩りぬ  
 握りしを鍵探しをり春うらら  
 冴返る地雷踏みしと助言され  
 虎の目の瞬きほどに二月尽  
 ここかしこ禁煙の増え春の雲  
 妊婦さんに席を譲れば春うらら  
 春の堀川鶉きよろりとダイビング  
 合格の番号踊る春の風  
 鼻かぜの薬を試し花粉症  
 山から山へ親譲りの雉の声  
 頬刺して目刺のつもり真鯛ら  
 世の中に馴染んだ途端雛納め  
 啓蟄に慌てて出れば堀の中  
 恋猫の帰宅時間で知れる結果  
 自画自賛鱈大根の琥珀色  
 春なれば菜の花色の服にせむ  
 初しぼり五臓六腑に沁みわたる  
 父植えし誕生記念の花大樹  
 遊学の孫へ送るや春の味  
 通販のモデルは美しき春の服  
 カケ競馬アベノミクスのじり貧に  
 ひきこもり啓蟄のごと陽に出でよ  
 水仙咲く日本灯台保存会  
 怪文書来るうららかに姉帰る  
 百円のコイン散らばる初詣  
 破天荒な世界始まる二月尽  
 春一番これが二番と混ぜ返す  
 鶴島に鴨亀島に亀亀鳴けり  
 空も吾も泣き顔となり春愁ふ  
 黄の帽子の子ら乗せたわむ春のバス  
 クレソンの緑新し朝の卓  
 梅の花入学近き曾孫くる  
 孫たちの賑はひあふれ春の家  
 手折られて食卓にある庭椿  
 大榎宿木ばかりが芽吹きけり  
 盆梅や空洞の幹振れ咲く  
 卒業式終へて直後に入試かな  
 陽炎や男の価値も揺らめける  
 約束の時間ですよと春一番  
 口紅が唇もとむ春の宵

太田史彩  
 太田史彩  
 太田史彩  
 大林和代  
 大林和代  
 大林和代  
 小笠原満喜恵  
 小笠原満喜恵  
 小笠原満喜恵  
 岡田廣江  
 岡田廣江  
 小川鮎太  
 小川鮎太  
 小川鮎太  
 加藤澄子  
 加藤澄子  
 加藤澄子  
 門田智子  
 門田智子  
 門田智子  
 金城正則  
 金城正則  
 久我正明  
 久我正明  
 久我正明  
 工藤泰子  
 工藤泰子  
 工藤泰子  
 桑田愛子  
 桑田愛子  
 桑田愛子  
 近藤須美子  
 近藤須美子  
 近藤須美子  
 佐野萬里子  
 佐野萬里子  
 佐野萬里子  
 下嶋四万歩  
 下嶋四万歩  
 下嶋四万歩

誤字脱字キラキラネームの揺れる絵馬  
 バレンタイン児は奥の手のキスを添へ  
 啓蟄や納屋から起こす耕耘機  
 素通りのエレベーターや春立てり  
 鬼役のほろ酔ひ機嫌豆を撒く  
 恋猫のしてやったりと凱旋す  
 百歳へ流れ流れて雛の舟  
 修験道めく梅林のうしろ側  
 春愁や睡眠薬の抜けぬ朝  
 それぞれの位置と持ち物雛に問う  
 キーコキーコ春がブランコ押していた  
 年ごろの娘と暮らしてます春霞  
 次から次に雲 平成が終わるそうな  
 爺さんは昭和の気骨股火鉢  
 比翼塚羨ましいとひがんでら(彼岸寺)  
 手詰まりの俳人いつも亀鳴かし  
 親ばかり涙ぼろぼろ卒園歌  
 高層の窓辺の猫に恋するノラ  
 十億を払いて変装春一番  
 早春の飛鳥古墳にときめきし  
 城巡りする早春の一人旅  
 恋猫の追い詰められて床下へ  
 二人揃ふだけで幸せ日向ぼこ  
 如月や俺本命とチョコ見せる  
 春陰や今日も八十路の友の逝く  
 見上げれば辛夷の蕾に鳥さわぐ  
 朗報を聞いてか盆梅一気に咲く  
 伊予柑の味は滑稽舌笑ふ  
 義理チョコにときめくバレンタインデー  
 重たくて進まぬ自転車春一番  
 風一陣女雛庇ひて落つ男雛  
 昼霞会議の司会までかすみ

壽命秀次  
 壽命秀次  
 壽命秀次  
 白井道義  
 白井道義  
 白井道義  
 水夢  
 水夢  
 鈴鹿洋子  
 鈴鹿洋子  
 鈴木和枝  
 鈴木和枝  
 鈴木和枝  
 鈴木和枝  
 高田敏男  
 高田敏男  
 高田敏男  
 高田敏男  
 高橋きのこ  
 高橋きのこ  
 高橋きのこ  
 田中 勇  
 田中 勇  
 田中 勇  
 田中早苗  
 田中早苗  
 田中晴美  
 田中晴美  
 田中晴美  
 田村米生  
 田村米生  
 月城花風  
 月城花風  
 月城花風

恋猫の声高らかに二重奏  
 あめんぼに乗ってスイスイ春の瀬戸  
 立つたまま寝る技妻の特許かな  
 終ひまで鳴いてから行け歌詠鳥  
 房総のへの字への字の山笑ふ  
 検診無料治療有料春愁ふ  
 リハビリも二十日三寒四温かな  
 竜天に登る疲れてひと休み  
 東風吹かばモンローウオークおお猛烈  
 昨日今日あしたも続く四月馬鹿  
 春の川遊べ遊べと誘惑し  
 春の宵ビールのプシュッが冴えわたる  
 今朝の春水のなかなか湯にならず  
 ファッションの首の露出に春を知る  
 黄砂目に入らずベンチのカップルは  
 浅春のぬけがらなほすあしたかな  
 春めくや窓辺のねこへあかんべえ  
 袋かけ付かず離れず新婚さん  
 優先席の長生き自慢山笑ふ  
 受験絵馬落とされ神のしらんかほ  
 につこりと笑ったやうな春の服  
 春の雪かぶれば街はぬくさうに  
 初雷や母の小言の懐かしき  
 餅を焼く母に二つの座りだこ  
 春一番吹けば耳鼻科の賑はへる  
 肥満体正座の雛に憧がるる  
 早く心宥(なだ)め宥めて春を待つ  
 老い五体三寒四温迷いけり  
 孫安堵入試地獄に桜咲く  
 立ち雛足の浮腫みの如何ばかり  
 身の上はパートタイマー春炬燵  
 長病みの病室を逃げ春の道  
 長病みや春の来る日を医師に問ひ  
 耳立てて恋は寝て待つ恋の猫  
 椀に満つ吐息舌打ち浅蜷汁  
 捏ね過ぎの一句を捨てるおぼろかな

土屋泰山  
 土屋泰山  
 土屋虹魚  
 土屋虹魚  
 飛田正勝  
 飛田正勝  
 飛田正勝  
 西をさむ  
 西をさむ  
 西をさむ  
 花岡直樹  
 花岡直樹  
 林 桂子  
 林 桂子  
 林 桂子  
 原田 暉  
 原田 暉  
 久松久子  
 久松久子  
 久松久子  
 日根野聖子  
 日根野聖子  
 日根野聖子  
 廣田弘子  
 廣田弘子  
 廣田弘子  
 細川岩男  
 細川岩男  
 細川岩男  
 堀川明子  
 堀川明子  
 本門明男  
 本門明男  
 南とんぼ  
 南とんぼ  
 南とんぼ

マスクして隙を見せない女どち  
 尻に根の生ゆるころかな蒔蘿草  
 落椿ふぐり四つのその先へ  
 啓蟄や動き出したる腹の虫  
 建国日歌を忘れた日本人  
 竜馬行く髪なびかせて懐手  
 花冷にしまうつもりの服を出す  
 直角に曲がる癖あり恋の猫  
 外様なる城址の桜満開に  
 雛様の何か語らんおちよぼ口  
 芽吹き待つ山をノックや雨の音  
 群るるほか世界を知らず犬ふぐり  
 春うらら手枕に乗り夢飛行  
 パックから睨みをきかせ桜鯛  
 イライラの元はいろいろ春の鬱  
 へそくりを機密費と書き年度末  
 マスクして鏡に吾を訝しむ  
 遠足の御馳走だつたゆで卵  
 どぶ池やかかはづ落ち込む泡の音  
 目覚むればムンクの叫び目借時  
 春風が改札スーとSuicaかな  
 挿木にも分け隔てなく光降る  
 陽炎は遅刻の訳になりません  
 逃水はたぶん海まで逃げてゆく  
 春の昼郵便受けは玉手箱  
 ニッポンにニホンのなじみ春炬燵  
 雪解けて襖障子の軽さかな  
 乗つ込みの真鯛竿にも御神酒かな  
 一掴みおまけと呉るる浅蜷壳  
 太陽の息吹オーロラ明滅す  
 筋雲を撮れば大オーロラと化し  
 犬ぞりのけなげな走り痛み入り  
 あの人春大根を買った人  
 地元から食パンデビュー春の雲  
 そんなに褒められてもと蛤汁  
 艶聞に村を沸かせて老いの春  
 艶聞は長寿の秘訣春謳歌  
 艶といふ出で立ち老いのしやなりかな  
 沈丁花一粒ごとに咲きにけり  
 啓蟄の蛙跳び出す鎌の先  
 酔心地ゆるゆる眺め春の月  
 咲き終へし花びら風と戯れる  
 手花火に憩ふ昭和の大所帯  
 カリスマの忍者もどきや走馬灯  
 すばすばとカラス水飲む夏に入る  
 鶯の初音は父の声かとも  
 露天湯に篝火映し春の宵  
 引越しはVIP待遇雛人形

椋本望生  
 椋本望生  
 椋本望生  
 村松道夫  
 村松道夫  
 村松道夫  
 村山好昭  
 村山好昭  
 村山好昭  
 百千草  
 百千草  
 百千草  
 森岡香代子  
 森岡香代子  
 森岡香代子  
 八木 健  
 八木 健  
 八木 健  
 八洲忙閑  
 八洲忙閑  
 八洲忙閑  
 八塚一青  
 八塚一青  
 八塚一青  
 柳 紅生  
 柳 紅生  
 柳村光寛  
 柳村光寛  
 柳村光寛  
 山下正純  
 山下正純  
 山下正純  
 山本 賜  
 山本 賜  
 山本 賜  
 横山喜三郎  
 横山喜三郎  
 横山喜三郎  
 横山洋子  
 横山洋子  
 吉川正紀子  
 吉川正紀子  
 吉原瑞雲  
 吉原瑞雲  
 吉原瑞雲  
 渡部美香  
 渡部美香  
 渡部美香